

# 春林軒門人赤石希範による 乳癌手術図譜出版の計画

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成27年12月1日／受理：平成28年4月22日

**要旨：**1809年に華岡青洲の門人赤石希範（1785-1847）は青洲の乳癌手術図譜の出版を計画した。赤石が出版に積極的であった理由は不明であるが、青洲の乳癌手術の技に感激し、その情報を仲間にも知らせたかったためと思われる。赤石の懇願にも拘らず、青洲は「諾」とも「否」とも答えなかった。青洲の許可が得られなかったが、赤石はどうか出版しようとして青洲の友人の漢学者崖 熊野（1734-1813）に序文を求めた。「乳癌図譜」は赤石が崖に持参した写本と考えられ、赤石の序と13症例の乳癌手術の図が含まれている。赤石の序、他の写本からの崖の序文によって実現しなかった乳癌図譜の出版の事情が判明した。

**キーワード：**赤石希範、華岡青洲、崖 熊野、乳岩図譜、乳癌手術の図譜

## 1 はじめに

日本麻酔科学の歴史<sup>1)</sup>は華岡青洲（以下「青洲」と略）にまで遡るが、青洲に関してはすでに呉秀三の『華岡青洲先生及其外科』<sup>2)</sup>があり青洲の医学のすべてを解き明かしていると思われた。しかしこの著を精読する多くの点が未解決のまま残されていることが分る。その一つは青洲による著書出版の問題である。青洲は生涯、自らは一冊の著書も上梓しなかった。「華岡氏遺書目録」<sup>3)</sup>を編集した佐藤持敬によれば、その理由は青洲が「自分の医術は心に浮かんだことに手が自然に反応しているのであって、それを言葉で表現することも、筆で書き表すことも出来ない。出版を薦める者があるが、出版したとてそれは滓のようなもので、何の足しにならう。」<sup>4)</sup>と考えていたからであった。このために華岡流の医術は多くの写本として伝えられることになったが、書写が繰り返されることによって誤字、脱字、文章の脱落や付加、題名の取り違いなどが生じ、結果的に佐藤持敬が言うように「同名而异書」、「異名而同書」という

混乱を招く原因になった<sup>4)</sup>。

したがって華岡流の医術の普及という問題を考える上では出版の問題は無視できないが、乳癌の手術的治療が軌道に乗り始めた1809年に、門人の一人赤石希範が乳癌手術の図譜の出版を計画したことが知られているものの、呉もその著で赤石の企画について明確に記述せず、わずかに青洲の出版に対する考えについて断片的に触れただけであった<sup>5)</sup>。著者もこの問題について言及したが、従来の見解を大きく進展させるまでには至らなかった<sup>6)</sup>。今回、赤石が出版の準備に使用したと思われる一写本を見出し、出版の経緯などに関連して二、三の新知見を得たので報告したい。

## 2 赤石希範の図譜出版の意図と 崖 熊野の序文

1809年3月26日に春林軒に入門した備前の赤石希範（通称退蔵、字は宋相、号は槐陰、1785-1847）<sup>7)</sup>は華岡青洲の乳癌手術の図譜を出版しようと考えた。その時期は謄写本に見られる赤石自身の記述から1809年の5月末日と思われる<sup>8)</sup>。入

門してまだ2カ月しか経っていない赤石をして乳癌手術の図譜を出版しようと駆り立てた動機は知る由もないが、一つには赤石が春林軒でそれまでに行われた10数例の乳癌手術の図を見て驚嘆し、上梓することによって華岡流の医術を広く医師仲間知らしめようとしたのではないかと推測される。しかし師の青洲はこれに対して積極的ではなかったというよりも、「諾」とも「否」とも言わなかった。赤石はどうか出版しようと考えて和歌山藩の漢学者崖 熊野(名は弘毅、字は剛先、1734-1813)に序文を求めた。崖は青洲より31歳も年長で、しかも青洲をよく知る人物であった。諸写本に引用されている崖の序文<sup>9)</sup>によってその間の事情を知ることが出来るが、序文の末尾に次のような記述がある。

頃日、門人其疎跡を集め、刻して以て之を四方に公にせんとす。華岡師唯せず。又否とせず。持ちて以て之を崖子に謁む。崖子曰く。又何の傷也。若し夫れ師の鑿に倣って指を染める者、固より言を須めず。世の乳岩を患う者、其の依頼する所、幸いに此書有り。則ち後来必ず彼婦に学歩する者有り。由りて以て之を視れば、其を刻すること何ぞ止むべきか。其を刻すること何ぞ止むべきか。稗府 崖 弘毅剛先 識(原漢文、一部に欠字と誤字があると思われ、他の写本で補って読んだ一著者)

この序文の最初で崖は華岡青洲の医師としての医の技量を賞し、患者に対する真摯な態度を高く評価している。次に青洲が行った最初の乳癌手術患者である藍屋 勘の手術について生き活きと臨場感溢れる描写をしており、最後に上に引用した文章が続く。

崖の序文は年紀を欠くので書かれた時期は明確でないが、少なくとも崖が没したのは1813年であるからそれ以前であること、赤石希范の需に応じて崖の序文が記されたと考えられること、赤石が図譜出版を計画したのは1809年5月末日であり、当時このような具体的な計画を進めていたのは赤石のみであったこと、後述するように崖の序

文は赤石の序に対応する形で結ばれていることなどから、崖の序文は1809年5月末日から幾ばくも経っていない時期に完成したことは間違いはない。この頃、門人の間に青洲の医術の著書出版の企てがあったことは、朝倉荊山(1755-1818)の青洲宛ての書簡に「足下の大造、神と謂うべし。之に依って高徒勸奨につき、著書上木之挙御尤もに存じ奉り候。右に付き御相談之義等御坐有るべく、段々仰ぎ聞え承知仕り候。」とあることによって知られる<sup>5)</sup>。書簡中に「僕年已五十四」とあって荊山54歳(数え)であったことから、1808年にこの書簡が認められたことが分る。この頃から青洲の著書を出版しようとする動きが門人たちの間に広がっていたことを示している。そしてこのような運動を積極的に進めようとしたのが門人の一人赤石であったことが理解されよう。

崖の序文中「持ちて以て之を崖子に謁む。」とあるが、「持ちて」とあるがその目的語はその直前に記されているように頃日、「門人」が「刻して以て之を四方に公にせん」として集めた「疎跡」であった。つまり赤石は草稿を持参して崖に序文を求めたのである。赤石の試みは青洲が「唯せず。又否とせず。」としたために進捗しなかったが、赤石は何とかこの企てを実現しようと崖の序文を求めたことが理解される。またこの「疎跡」は単に文章だけでなく、手術の様子を描いた図を含むものであり、さらに実際の手術の様子を崖が赤石から聞いて序文を書いたと推察される。序文中で藍屋 勘の乳癌手術を「師の恢地に刃を遊ばすや、従容自在。婦亦居然として神色変わらず。其の肌膚を割開して其の筋脈を倫理し、其の纏膜を截りて其の肉血を収斂す。病魔奔突、靈房奏凱。捷手鹵獲する所、唯是一団の赤塊。」と表現しているが、勘の手術を描いた図だけを見てこのように描写するのは困難であろう。必ずや図に加えて赤石の詳細な説明もあったはずである。とくに「病魔奔突、靈房奏凱」の句は腫瘍が切除されて、青洲たちが「腫瘍がとれた！」と声を上げたことを意味している。これは図を見ただけでは絶対に出てこない表現である。実際の手術を観た人でなければ脳裏に浮かばない表現である。もちろん赤

石は1809年3月に入門したので1804年10月に行われた勘の手術を見学していなかったが、「乳巖姓名録」<sup>10)</sup>に拠れば赤石が入門した1809年3月26日から赤石が草稿を書いた5月末日までに4月4日に紀州日高郡土生村 徳右衛門の妻、5月22日に和歌山 太田屋忠兵衛の妻、5月24日に和州五条駅の勝股元傾の妻の3人の手術が行われているから、赤石はこれらを実際に見学したことは十分に考えられる。実際の手術の様子が崖に語られたからこそ、前述した崖の躍動感ある表現が生まれたのであろう。このように考えれば、崖が序文を執筆するに際して赤石の草稿の他に、赤石からの直接の解説があったことになる。赤石が持参した草稿には赤石の序と1809年5月晦日までに行われた手術の図を含んだものであったことが強く示唆される。なおこの草稿の図は赤石が描いたか否かは不明で、常識的にはだれか絵心のある人に依頼して書かせたとするのが適切であろう。

### 3 赤石希范の序と乳癌手術の図

呉はその著書の中で、「乳岩図譜」<sup>11)</sup>なる史料を紹介し、最初に崖の序文<sup>9)</sup>、末尾に赤石の序<sup>12)</sup>、そしてその間に和州五条 藍屋利兵衛の母、紀州橋本駅 鍛冶屋治兵衛の妻、紀州伊都郡麻生津彦兵衛の妻、紀州橋本駅 三河屋治兵衛の母、阿州徳島沖之洲 平七の母、紀州有田郡杉野原村重助の妻、紀州有田郡須原村 佐吾衛門の母、紀州名草郡大川浦 傳兵衛の母、阿州板野郡撫養南浜 天野屋幸作の母、紀州橋本駅 三河屋治兵衛の母（再発）、美濃羽栗郡不破一色村 文八の妻、紀州日高郡土生邑 徳右衛門の妻の図があり、さらに野村 鄂による飛州高山 広瀬屋利兵衛の妻の手術記録が附されているとしている。この呉が用いた「乳岩図譜」は佐藤時敬が編集した「華岡氏遺書目録」<sup>3)</sup>に披見されず、現在の所在を特定できない。この「乳岩図譜」<sup>11)</sup>には1810年5月に行われた広瀬屋利兵衛の妻の手術記録が含まれている<sup>13)</sup>。1809年6月頃に赤石が崖に示した草稿にはこの記録は入っていないはずである。このことから「乳岩図譜」<sup>11)</sup>は赤石の草稿が完成した後で作られた写本であることは間違いないが、

その書写年代は不詳である。呉によれば、「乳岩図譜」<sup>11)</sup>は最初に崖の序文、次いで乳癌の手術の図、最後に赤石の序（跋）が来て、草稿の本来の姿を伝えている点で重要と思われる。藍屋利兵衛の母から徳右衛門の妻までの手術はいずれも1809年4月以前に行われており、赤石の序が完成した1809年5月31日以前の症例で、これらの図が写本中に描かれていたことは時期的に整合性がある。

上述したように赤石が序文を求めて崖に示した草稿は「赤石の序（または「跋）」+「手術図」（1809年5月末日までに行われた手術）、または順序がこの逆の「手術図」+「赤石の序（写本に拠っては「跋）」のはずである。赤石の序（跋）を有する写本で、著者が現在までに閲覧できたもの、ないしは複写を入手できたものは、呉が示した写本を含めて表1に示す通り13本で、それらの内容の構成も含めて表1に記した。写本のAからKまでのすべては1810年6月に作られた野村鄂による広瀬屋利兵衛の妻の乳癌手術の記録を収載しており、赤石の草稿に野村による記録が後に付加された後年の写本であることが分る。さらにこれらの中でA, F, Jでは1810年6月以降に行われた手術の図を含んでおり、当初の図にさらに新しい図が付け加えられた写本であることが分る。したがって赤石の草稿の原初の形態を伝えているのはLとMの写本のみである。

Mは1849年に澤井宗順が書写したものであり、全体的に見れば、図が最初に来て赤石の序は最後にある。藍屋 勘の坐像の図、メスと鋏の図が欠落しており、本文、図の説明文に欠字が見られることから、数回の書写を繰り返して作られた写本であろう。図および字は比較的粗末である。なお澤井の名は「華岡青洲先生春林軒門人録」<sup>14)</sup>には見出されない。Lは1809年5月晦日、つまり赤石が草稿を完成した日に赤石と同じ春林軒の門人守安 瑞によって書写された写本である。恐らくこの写本が赤石によって序文を求めるために崖に提出された一本と思われるので、以下この写本について考察を加える。

表1 赤石希范の序を有する諸写本とそれらの内容

A 「華岡家治験図巻第二」	= 赤石の序	+ 野村の記録+乳癌14症例の図+他 (文政7年9月17日の木津川新八の娘の図を含む)
B 「乳岩図譜」	= 赤石の序+崖の序+野村の記録+乳癌12症例の図	
C 「奇患図」	= 赤石の序+崖の序+野村の記録+乳癌?症例の図+他 (乳癌患者氏名記載なし)	
D 「乳癌割截図一卷」	= 赤石の序	+ 野村の記録+乳癌10症例の図
E 「春林軒二十一種十四集」	= 赤石の序+崖の序+野村の記録+乳癌?図+他 (乳癌患者氏名記載なし)	
F 「乳癌図」	= 赤石の序	+ 野村の記録+乳癌10症例+他 (小豆島室村長太夫の妻 文化12年6月11日の図を含む)
G 「乳岩手術図」 (田中義文氏所蔵)	= 赤石の序+崖の序+野村の記録+乳癌?図	摘出腫瘍に名なし
H 「乳癌奇病図」	= 赤石の序	+ 野村の記録+乳癌13症例の図 (広瀬屋利兵衛の妻の図を含む)
I 「華岡家奇患図」	= 赤石の序+崖の序+野村の記録+乳癌10症例の図+他	
J 「華岡塾着色図」	= 赤石の序+崖の序+野村の記録+乳癌12症例の図+他 (文政7年9月17日の木津川新八の娘の図を含む)	
K 「乳岩図」	= 赤石の序	+ 野村の記録+乳癌15症例の図
L 「乳癌図譜」	= 赤石の序	+ 乳癌13症例の図 (文化六年五月晦日 備中 守安瑞 書写)
M 「乳癌図譜」	= 赤石の序	+ 乳癌13症例の図 (嘉永二年三月二十七日澤井宗順の写本)

## 説明

「他」: 乳癌以外の手術の図 「?」: 患者名の記載がないので症例数は不詳

番号 A: 呉 秀三, 『華岡青洲先生其外科』, p.399-401.

B: 同上, p.401-2.

C: 杏雨書屋所蔵(乾-4881)

D: 杏雨書屋所蔵(乾-4242)

E: 杏雨書屋所蔵(杏360-3169)

F: 東洋文庫所蔵(XV-1-1021)

G: 京都市田中義文氏所蔵

H: 東京都長田 功所蔵

I: 東北大学図書館蔵(狩9-22283)

J: 内藤記念くすり博物館所蔵(大同薬室文庫35733)

K: 京都府立総合資料館所蔵(D和494.5 N89)

L: 国際日本文化研究センター所蔵(SC/857/Ny)

M: 研医会図書館所蔵(No4762)

## 4 写本「乳癌図譜」について

この写本は現在, 日本国際文化研究センターに所蔵されているが, 宗田 一の旧蔵本である<sup>15)</sup>. 大きさは縦27cm, 横19.7cm, 四つ目, 袋とじて, 紺色の表紙には題箋を欠く. したがって「乳癌図譜」は後年付された仮題である。「癌」の字は不適切と思われるが, 変更すると混乱を招くので本稿では以後この題名を用いる. 表紙裏には「宗田蔵書」の朱印が押印され, 全13丁である. 彩色.

1丁表から2丁裏までは赤石の序が記されており, その末尾に「文化己巳夏五晦日 備前 赤石希范 識 備中 守安 瑞 謹書」とある(図1, 2). 守安は備中の窪屋郡三軒屋の出身で, 1809年4月8日に春林軒に入門した<sup>16)</sup>. 赤石の入門に遅れることわずか二週足らずであったことに加え, 備前と備中と隣藩であり, 同期の入門者として, また守安の能筆振りに感心して草稿の書写を依頼したと考えられる. 3丁表は藍屋 勘の坐像, 同裏はメス(上)と鋏(下)の図, 4丁表は乳房の図で乳頭



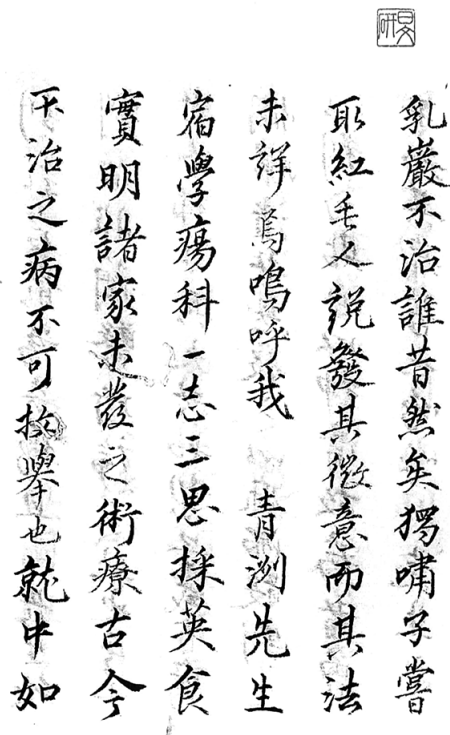


図1 「乳癌図譜」一丁表。赤石の序の冒頭。  
(国際日本文化研究センター所蔵)

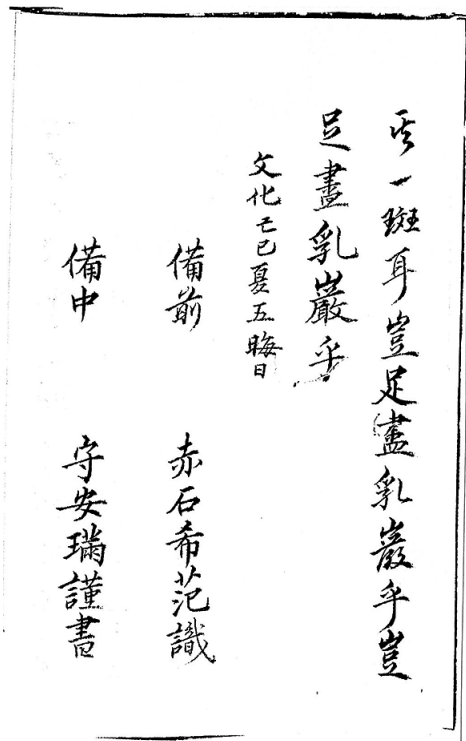


図2 「乳癌図譜」二丁裏。赤石の序の末尾。  
(国際日本文化研究センター所蔵)

の上に切開創，右上に病巣が描かれている。同裏は乳房を左から見た図で，切開創に術者の左手2-5指を挿入した図，5丁表は両手を創中に挿入し腫瘍塊を切離する様子を描いているが，メスを持った右手人差し指と左手人前指は透視図的に描かれている（図3）。同裏は両手を創中に挿入しているが，腫瘍塊は創口から殆ど取り出された状態にある。6丁表は摘出された腫瘍塊が上，下に描かれ，その右に「和州宇智郡五條駅藍屋利兵衛母歳六十」と二行に書かれてある。同裏は腫瘍塊を縦割りにして示した図である。7丁表は腫瘍塊と縦割りの図を左右に示しており，右下に「紀州橋本駅鍛冶屋治兵衛妻歳三十五」と二行に書かれてある。同裏は乳房に切開創が描かれ，その右上に「紀州伊都郡麻生津郷西之脇村彦兵衛妻歳五十七」と四行に書かれてある。8丁表は上に腫瘍塊，下にその縦割りの図が示されている。同裏は上に腫瘍塊，下にその縦割りの図が描かれ，右に一

行で「紀州橋本駅三河屋治兵衛母歳六十」と書かれている。9丁表は上に腫瘍塊，下に横に二分された腫瘍を示し，その右に一行で「阿州徳島沖之洲水主平七母歳五十六」とある。同裏は乳房と病巣の図で，右上に「紀州有田郡保田郷杉野原村重助妻歳四十三既穿潰而経五六月其围八寸其深一寸」と5行で書かれている。10丁表はその摘出腫瘍塊一個の図である。同裏は上に腫瘍塊，下に縦割した腫瘍の図で，その右に「紀州有田郡須原村佐五衛門母歳六十四既有穿潰之勢」と二行で記述されている。11丁表は小さな腫瘍塊1個の図で右に一行で「紀州名草郡大川浦傳兵衛母歳五十五」とある。同裏は乳房と切開創，病巣を示した一図で，右に三行で「阿州板野郡撫養南浜天野屋幸作母歳五十四」とある。12丁表は天野屋幸作の母から摘出した腫瘍塊とその下に横に切断した腫瘍の図を示している。同裏は腫瘍塊とその下に横に切断した腫瘍の図で右に二行で「紀州橋本駅

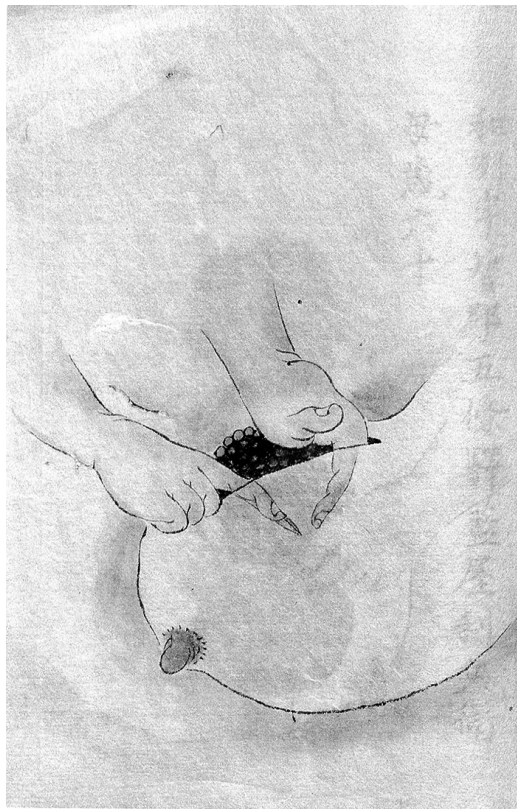


図3 「乳癌図譜」五丁表。  
(国際日本文化研究センター所蔵)

三河屋治兵衛母六十一再発」と書かれている。13丁表は腫瘍塊と下に横に二分割した腫瘍が描かれており、左に「美濃羽栗郡不破一色村文八妻歳三十七」とある。同裏は前と同様に上下に腫瘍塊と横分割された腫瘍の図が示され、右に一行で「紀州日高郡土生邑徳右衛門妻歳四十八」と記されている。裏表紙の裏、つまり13丁裏に面した部分に小さな腫瘍塊が一個描かれ、右に「和州五條駅勝股元碩妻歳三十余」とある。

図は細かい点まで丁寧に描かれており、図中に記入された患者の住所、姓名の書体は「乳」の第8画や「歳」の第11画、「説」の第14画の終筆に見られる真上への跳ね上げ、「宀」の第1画が高い位置にあることなどが本文のそれらと近似していることから、図中の説明文は序と同じく守安の手になると考えたい。

赤石自身、この漢文の序の中で図譜出版の意図

を物語って重要であるので、以下にその読み下し文を示す。

乳巖の不治、誰昔より然り。獨嘯子嘗て紅毛人の説を取りて其の微意を発せり。而して其の法は未だ詳らかならず。嗚呼、我が青洲先生、瘍科を宿学して一志三思、英を採り実を食らい諸家の未だ発せざるの術を明らかにし、古今不治の病を療すること枚挙すべからざる也。就中、乳岩を割くが如きは最も奇術と為す。且つ先生の割く所の者は蘭医の論ずる所の比に非ざる也。其の小なる者は柿子、其の大なる者は梨子の如く、或いは腐爛膿潰するもの有り。然るに之に服するに麻沸散を以てし、之を割くに利刀を以てし、之に貼るに神膏を以てす。故に病者は曾て其の痛苦を知らざる也。嗚呼、先生の功、豈偉ならざらんや。茲に其の割法及び治験者十餘輩を図きて、以て同志に示す。然るに乳岩の病たるや固より尋常の術を以て治すべき者に非ず。則ち妄りに治術を施せば、却って命期を促めん。角を療して牛を殺すの識有るを恐る。故に其の法精ならざるべからず、其術は慎まざるべからず。今、此の図は但其一斑を見るのみ。豈乳巖を盡すに足らんや。豈乳巖を盡すに足らんや。

赤石は「茲に其の割法及び治験者十餘輩を図きて、以て同志に示す。」と記しているから、門人たちとの間で、当時華岡流の医術の中核をなし、乳癌手術の情報を仲間と共有したいと考えて図譜の出版を計画したことが分る。但しこの冊子が乳癌治療の僅かな側面を示すに過ぎないことを自覚していた。これは末尾の二句「豈乳巖を盡すに足らんや。豈乳巖を盡すに足らんや。」(原文は「豈足盡乳巖乎。豈足盡乳巖乎。」)で表現されているが、この6字繰り返しの二句は重要である。というのは前に引用した崖の序文の末尾は「其を刻すること何ぞ止むべきか。其を刻すること何ぞ止むべきか。」(原文は「刻書何可止乎。刻書何可止乎。」)と6字の繰り返しなっており、明らかに崖が赤石の文章を読んでそれに対応する々6字の繰

り返しの句を末尾に用いてその序文を締め括ったことが強く示唆されるからである。いずれにせよ、この写本は赤石が序を書いたその日に書写された一本であること、丁寧に書写されていること、図も丁寧にしかも躍動感を以て描かれていることから考えて、赤石が序文を求めるために崖に持参した一本ではないかと強く示唆される。

## 5 写本「乳癌図譜」に描かれた患者について

赤石は序の中で「茲に其の割法及び治験者十餘輩を図きて、以て同志に示す。」と記したが、実際にこの写本には13症例の乳房の切開図、摘出

腫瘍の図が描かれているので「十餘輩」の言葉との間に整合性がある。最初に描かれている藍屋勘については勘の坐像1図、手術道具（メスと鉗）1図、手術の様子が4図、摘出腫瘍塊の2図（半丁に描かれたものを1図として）で詳しいが、他に症例ではすべて摘出された腫瘍塊である。赤石がこの序を書いた時点で、「乳巖姓名録」に抛れば春林軒では23症例の手術が行われていた<sup>17)</sup>。赤石の症例を「乳巖姓名録」の症例を対比してみたのが表2である。23例中13症例の図を赤石が採用したことになる。赤石の序が完成したのは1809年5月晦日であるが、最後の図はこれより7日前に行われた勝股元碩の妻の手術であった。こ

表2 写本「乳癌図譜」に描かれた症例と「乳巖姓名録」中の初期25症例との比較

番号*	手術年月日**	「乳巖姓名録」 患者の住所と氏名	「乳癌図譜」中の 図の有無と順番 図の順番 (×は図を欠く)
4	文化元甲子年十月既望	和州五條駅 藍屋利兵衛 母	①
5	文化二乙丑年正月六日	同国狐井村 彦右衛門 内	×
6	同 三丙寅年六月十二日	紀州和歌山鍛冶橋広瀬 大田屋太郎兵衛 内	×
7	同 七月二十三日	伯州下廣口村 善次 母	×
8	同 四丁卯年正月念九	紀州橋本駅 鍛冶治助 妻(年三十)	②
9	同 二月二十日	泉州貝塚 向野次助 内	×
10	同 三月二十九日	紀州麻生津 彦兵衛 内	③
11	同 五戊辰年二月望	紀州橋本駅 三河屋治兵衛 内	④
12	同 三月七日	阿波徳島沖洲 水主平七 母	⑤
13	同 五月望	紀州有田郡須原 佐五右衛門 母	⑦
14	同 六月十三日	紀州山保田杉原村 重助 内	⑥
15	同 七月念二	紀州大河 傳兵衛 内	⑧
16	同 八月十三日	阿波撫養 京屋幸作 母	⑨
17	同 十月九日	紀州多賀郡松原 十助 内	×
18	同 十一月晦	同 山ノ保田 重助 内	×
19	文化六己巳年二月二日	美濃不破一色村 文八 内	⑩
20	同 二月十二日	紀州山保田 重助 内	×
21	同 四月四日	同日高郡土生村 徳右衛門 内	⑫
22	同 五月念二	同 和歌山 太田屋忠兵衛 内	×
23	同 五月念四	和州五條駅 勝股元碩 内	⑬
参考	五月晦日	赤石希范の「序」完成	
24	同 六月六日	紀州橋本駅 鍛冶甚兵衛 内	×
25	同 九月十三日	同国所 三河屋治兵衛 母(再発)	⑩

### 記号説明

\*：呉の「乳巖姓名録」中の名前に番号を付けたもの。藍屋 勘は姓名録では4番目の患者となる。最初の3人の患者は手術を受けなかったため、手術を受けた最初の患者は藍屋 勘である。

\*\*：4番目の藍屋 勘以降は手術を受けたと思われるが、必ずしもすべてが実証された訳ではない。ここでは一応手術日としておく。



のように赤石は直前の症例までも採用したことが知られる。

写本の症例の順番は大約「乳巖姓名録」の順番にはほぼ一致しているが、文化5年5月（以下この段では史料との関係で和年号を用いる一著者）の「佐五右衛門母」と同6月の「重助内」は写本では逆になっている。また「乳巖姓名録」の25番目「三河屋治兵衛母」（再発）は他の多くの写本で「文化六年春二月」に再手術を受けたとあり、それを証するかのようにこの「乳癌図譜」では10番目に描かれて、11番目の文化6年2月2日「文八内」の前に位置している。このようなことを考慮すれば、「乳巖姓名録」の期日の記述は必ずしも正しい訳ではなく、多くの誤記や遺漏があると推察される。例えば呉も引用している「華岡氏治術図識」<sup>18)</sup>に拠れば、摂州大阪座間の河内屋清右衛門妻（歳六十一）は「文化三年四月八日」に手術を受けているが、「乳巖姓名録」にその名はない。本来であれば6番目の症例である。また「華岡氏治術図識」では摂州高槻京屋甚兵衛母（歳五十六）の図が文化5年3月の水主平七母と文化6年4月の徳右衛門内の図の間、そして河州丹比郡嶋邑亀谷利助妻（歳四十八）の図は文化6年2月の三河屋治兵衛（再発）と文化5年7月の大河（正しくは「大川浦」）の傳兵衛内との間に描かれているが、共に「乳巖姓名録」にはその名が披見されない。このように「乳巖姓名録」は不完全な史料であるので、これのみを根拠に綿密な考察を加えるのは問題があらう。

赤石がそれまで少なくとも20数例行われた乳癌手術症例の中で、なぜ13症例だけを選択して図譜の資料としたかは知る由もないが、単純に考えれば約半数の図が既に散失していたと思われる。赤石としてはより多くの図を採用したかったに違いないが、利用できる図が失われてなかったので、13症例の図で満足しなければならなかったのであらう。青洲が図の管理を比較的厳しくしていなかったことが原因と推測される。とくに「乳巖姓名録」の症例5, 6, 7の図が欠落しているのが注目される。青洲は藍屋 勘の死後約1年2カ月乳癌の手術を行わなかった。勘の死が予期し

ないほど早かったために青洲は手術法に何か問題がなかったか反省していた時期と著者は考える<sup>19)</sup>。当然、この間、診療は別として、新規の入門者を受け付けなかったし<sup>20,21)</sup>、図の管理などは疎かになりがちであったらう。その結果が図の散失として現れたと考えられる。

## 6 写本「乳癌図譜」の影響

残念ながら赤石の乳癌図譜を出版しようとする企画は実現しなかったが、次に述べる2点において、何らかの影響を及ぼした。

その第一点は、赤石がまとめた13症例の図は後に作られることになった多くの図譜の図の基本となったことである。例えば呉が示す「華岡家治験図巻第二」<sup>21)</sup>は19図を取めるが、その中の9図は赤石の13図の中に含まれ、呉のいう「乳岩図譜」<sup>11)</sup>は赤石の13図に広瀬屋利兵衛の妻の症例の図が付け加えられただけである。すでに拙著の中でも簡単に触れたが、華岡流の医術を伝える図巻は5系統に分類される<sup>23)</sup>。その一つは上に述べた「華岡家治験図巻第二」<sup>22)</sup>の乳癌症例を中心とするもので、その影響は管見によれば少なくとも10数本の写本に及ぶ。赤石が13図を作成した時には原図は春林軒に保管されていたが、後年作られた写本の図がすべて原図から作られた訳ではないであらう。写本が模写されて次から次へと模写が繰り返されたはずである。図が描かれることの淵源は藍屋 勘の手術時まで遡ることが出来るから、赤石の「乳癌図譜」は後年作られた多くの図譜の中核をなすと考えるのが適切であらう。

第二点は赤石の企画は1810年前後の春林軒における記録作成の機運の先駆けとなったことである。1809年の赤石による図譜出版の計画、1810年の野村 鄂による広瀬屋利兵衛妻の手術記録の作成、そして1811年の千葉良蔵の「辨乳岩証并治法」<sup>24)</sup>の作成などがあって、この期に何か記録を残そうという機運が門人たちの間に高まっていたのではないかと示唆される。この期に作成された信拠すべき写本は少なく、この問題を深く論ずるまでには至っていない。後日を期したい。

以上から現在、国際日本文化研究センターに所



蔵されている「乳癌図譜」は図譜の出版を計画した赤石希范が1809年に崖 熊野に序文を求めた際に持参した草稿であり、その中の藍屋 勘から勝股元碩に至る13症例の図は、後年作られた図譜類の基本となったと考えられる。

### 参考文献および注

- 1) Matsuki A. *A Short History of Anesthesia in Japan*. Hirosaki: Hirosaki University Press; 2013. p. 21–72.
- 2) 呉 秀三. 『華岡青洲先生及其外科』. 東京：吐鳳堂；1923.
- 3) 文献2. p. 381–7.
- 4) 文献2. p. 386.
- 5) 文献2. p. 387.
- 6) Matsuki A. *Seishu Hanaoka and His Medicine – A Japanese Pioneer of Anesthesia and Surgery –*. Hirosaki: Hirosaki University Press; 2013. p. 172–4.
- 7) 文献2. p. 487.
- 8) 本稿で使用した諸写本では、赤石の序（または「跋」）の日付はいづれも「五月晦日」である。
- 9) 文献2. p. 54–6.
- 10) 文献2. p. 276. 「医聖華岡青洲顕彰会」に保存されている名簿は「乳岩姓名録」であるが、ここでは文献2の呉の記述にしたがっておく。
- 11) 文献2. p. 401–2.
- 12) 文献2. p. 64.
- 13) 文献2. p. 270–2. この復刻文には欠字がある。完全な文は「青洲先生療乳岩」で、文献3にカラーで覆刻している。
- 14) 文献2. p. 449–517.
- 15) 題名は仮題である。請求番号はSC/857/Ny.
- 16) 文献2. p. 489.
- 17) 文献2. p. 274–6.
- 18) 文献2. p. 411.
- 19) Matsuki A. Seishu Hanaoka's Philosophy of Safety and Challenge. 『日本における麻酔科学の受容と発展』. 東京：真興交易医書出版部；2011. p. 52–68.
- 20) 松木明知. 『華岡青洲と麻沸散—麻沸散を巡る謎—』(改訂版). 東京：真興交易医書出版部；2008. p. 210.
- 21) 文献6. p. 76–7.
- 22) 文献2. p. 399–401.
- 23) 松木明知. 奇患図の研究. 『華岡青洲研究の新展開』. 東京：真興交易医書出版部；2013. p. 171–249.
- 24) 松木明知. 千葉良蔵の「南紀青洲先生乳巖治術口授」と「乳岩辨証」(乳岩弁)—1811年における華岡青洲の「乳岩」治療の実際—. 掲載決定.

# Kihan Akaishi's Publication Plan of an Illustrated Brochure on Breast Cancer Surgery by Seishu Hanaoka

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

In 1809, Kihan Akaishi (1785–1847), one of the disciples of Seishu Hanaoka who ran a private medical school “Shunrinken,” planned to publish an illustrated brochure on breast cancer surgery by Hanaoka. It was only two months after he enrolled at the school. Although details remain unknown as to why Akaishi was so active in publishing the brochure, it is likely that he was impressed by the skillful breast cancer surgeries done by Hanaoka and determined to prevail upon him to share information about them among his colleagues. On the request of Akaishi, however, Hanaoka responded with neither “Yes” nor “No” because Hanaoka thought that it was impossible to accurately describe his diverse medical practices. Although Akaishi failed to obtain Hanaoka’s permission to publish it, he tried to move further for the publication. He showed a manuscript containing Akaishi’s preface and illustrations of 13 cases of breast cancer surgery to Yuya Kishi (1734–1813), asking him to write a foreword to the manuscript. Kishi was a scholar of Chinese literature of the Wakayama domain and a close friend of Hanaoka. A manuscript tentatively titled “Nyugan Zufu” is most likely the manuscript that Akaishi showed to Kishi, and the preface by Akaishi and the foreword by Kishi from other manuscripts elucidated the situation of the unrealized publication of the brochure.

**Key words:** Kihan Akaishi, Seishu Hanaoka, Yuya Kishi, *Nyugan Zufu*, Illustrated Brochure of Breast Cancer Surgery